

1983年11月1日

No. 25



ひ

しょう



特集：総合科学部を考える

広島大学総合科学部広報委員会

目 次

| | | |
|---------------------------------------|-----------------|----------|
| 1. 特 集 総合科学部を考える | 編 集 部 | |
| 1) 学生アンケート報告(I) 現代総合科学部気質 | | 1 |
| 2) 総合科学部「10年目」の問題点を探る | | 4 |
| 3) リベラル・アーツ・カレッジを目指して 今堀誠二初代総合科学部長にきく | | 7 |
| 4) 他学部教官に聞く | | 13 |
| | 法学部教授 北 西 允 | 13 |
| | 文学部助教授 田 中 久 男 | 13 |
| | 理学部助教授 市 坂 純 雄 | 14 |
| 5) ひとことインタビュー「総合科学部って何？」 | | 15 |
| 6) 「暗い」「堅い」「偉い」!? 高校生から見た総合科学部のイメージ | | 16 |
| 7) ふりかえった総合科学部像 卒業生への質問 | | 17 |
| 8) 総合科学部生の分布図 | | 19 |
| ----- | | |
| 2. シリーズ「研究室巡り」その1 運動生理学の紹介 | | |
| | 保健体育講座助教授 菊地 邦雄 | 20 |
| 3. 過熱ノ 聴講手続争奪戦 | 編 集 部 | 22 |
| 4. シリーズ「数字」その1 1191 | 編 集 部 | 24 |
| 5. 昭和58年度新入生歓迎西条研修について | 学生生活委員会 | 25 |

— 表紙について —

時空を超えて自在にあらうとする者たち
時にその渦をまき込みながら
時にその渦にまき込まれながら
その一代でのなすべき年ゆえに
個という意識を越えて飛翔する
その流れ(志)をうけつごうとする者も
その流れ(志)に反旗を翻す者も
渦のひきおこす伸縮運動の中で
ゆがんでゆく三角形

1. 特集 総合科学部を考える

学生アンケート報告(Ⅰ)

1) 現代総合科学部生気質

一期生は偉かった!?

「昔は良かった」というセリフはお年寄の言うもので、弱冠10歳の、世界に翔く総合科学部生にあてはまるわけがない、と思っはみたものの、最近全体的に学生の質が落ちてきているという噂も聞き、もしかしたら、「昔は良かった」のかもしれないと思えてきました。そこで、総科生第1号の49年度生と、最も新しい総科生58年度生を比較する方法はないものかと考えてみました。

49年に発行された『飛翔』第1号をめくってみますと、学生相談室が49年度生に対して行った学生アンケートの結果報告が載っています。それで今回、その時と同じ調査項目を含んだアンケートを58年度生に対して実施することを企画し、先日行いましたので、その結果を2回に分けて報告し、比較検討してみたいと思います。また今回は、同時に教官の方々の総科生に対する印象、意見等も調査しましたので、これも報告してみたいと思います。

表1 回答者数と回収率

| 49 生 | 男 | 女 | 計 |
|---------------|-----------------|----------------|------------------|
| 回答者数 在籍学生数 | 89(92.3) 106 | 15(98.5) 16 | 108(92.5) 122 |
| 58 生 | 男 | 女 | 計 |
| 回答者数 在籍学生数 | 55(62.5) 88 | 23(62.2) 37 | 78(62.4) 125 |

※ 49生の計に不明4を含む。
カッコ内はパーセント。

ここで注目すべきことは、お気付きのように49年度生と58年度生では、その男女比が大きく異なるということでしょう。新設学部、それも全国で初めての総合科学部という学部だっただけに、49年度はより保守的な女性が尻込みしたせいかもしれません。この現象は50年度には女子学生42名(35%)となり、現在のそれに近いものになっています。

ところで今回の調査における回収率が、企画の遅れ、実施の際の学生編集部の手不際などのために、かなり49年度を下まわってしまいました。以下における結果の比較の際に若干不都合があるかと思いま

すが、強引に論を進めたいと思います。

問1 大学進学のための目的

『あなたが大学に進学することにしたのはどのような目的からですか。』(回答は、1(全然そのためでない)から、5(完全にそのためだ)までの5段階で求めた。)

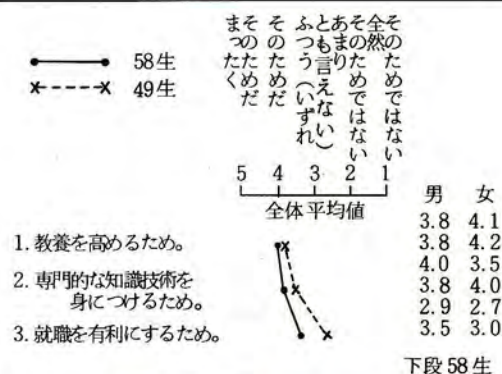


図1 大学進学のための目的

目を引くのは、「就職」を考えて進学した学生が増加していることでしょう。確かに新設学部という事実は、就職には不利に働くでしょうから、49年度生は就職を考えていては、総合科学部進学に踏み切れなかったのかもしれませんが。それに対して現在は、総合科学部に入ってもある程度の就職の見通しが立てられるようになってきた、ということになるでしょう。

なお、「その他」欄への自由記述には、「社会に出るのを延ばすため」等の、モラトリアム志向の記述と、単に「遊ぶため」という記述が多い印象を受けました。他には「多くの人と接触したい」、「自己修練」、「心ゆくまでカーブの応援をしたいから」など、また「わかりません」というものもありました。

問2 総合科学部に対する期待

『あなたは、なぜ広島大学総合科学部に入学されましたか。』(回答方法は問1と同じ)

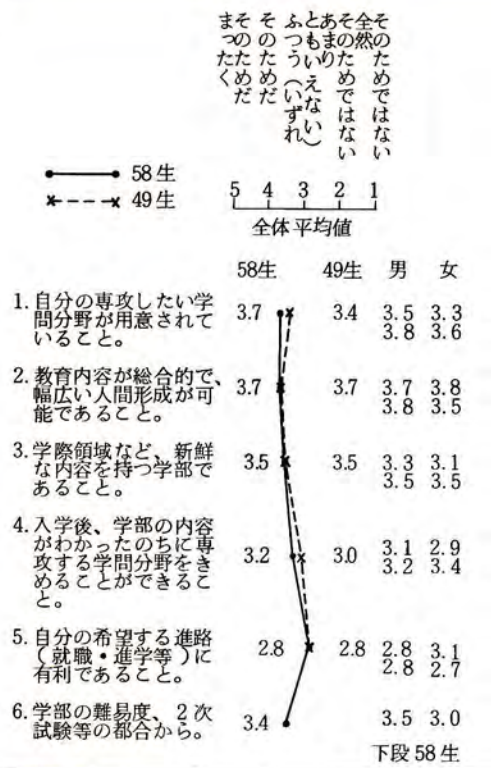


図2 総合科学部に対する期待

あえて言えば「自分の専攻したい分野」と「入学後の専攻分野決定」を大きな理由として挙げている人が増えています。問1において、モラトリアム型学生の増加を感じさせる記述と考え合わせて「入学後、自分のやりたいことを決定した時に、その分野が用意されている」、いいかえれば、「何をやりたくなくても、大体その分野が用意されている」ということで、総合科学部は選ばれているのではないのでしょうか。それで良いのか悪いのかは別問題でしょう。

今回のアンケートには、「学部の難易度、二次試験科目等の都合」という項目を含めましたが、それに対して全体平均として3.4の値を得ました。これらの条件は、49年度生でもそうであったか否かはわかりませんが、決して無視できないものであるということになるでしょう。

また「その他」欄への自由記述には、「自宅から離れてみたかった」、「地元である」、「めずらしいから」等が挙げられていました。

問3 大学院への進学

「あなたは将来、大学院へ進学する希望を持っていますか。」

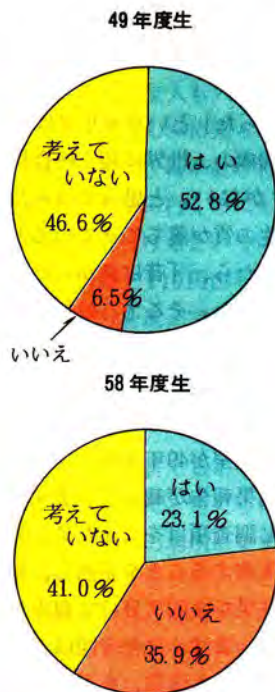


図3 大学院への進学

この結果を見るかぎり、著しく大学院進学希望者が減少しています。この質問は、大学院への進学希望が学問への意欲を表すと仮定された上での質問と考えられ、もしそうであるとすると、この結果は何か寂しいものを感じさせると思います。

ところで今回は、教官の方々へ総科生についての質問を行いましたので、回収分の中からその結果を報告したいと思います。

問1 「他学部の学生と比較して総合科学部生はどうですか。」

残念なことに、「個性、創造力、基礎力、目的意識が無い」、「よくさぼるし、成績もよくない」等多くは批判的なものでした。しかし中には、「センスは良い」、「相当優秀」という意見もありました。

問2 「共通一次導入以前の学生と比べてどうですか。」

やはり問1と同様の、批判的意見が多くみられま

す。「だんだん質が落ちていく」、「おとなしいだけが取柄」等の手厳しいものもありました。

問3 「総合科学部生を一言で表現すると！」

「明るい」、「特徴のない学生集団」、「デラシネ的」、「個性がない」、「モラトリアム」、「遊び人」、「目的意識のない学生」、「温和な坊ちゃん嬢ちゃん」、「周辺人」、「無気力」等。教官の方々の意見を鵜呑みにはできませんが、どうも情なくなってきましたか。

問4 「総合科学部生に対する要望がありますか。」

色々な言い方はありますが、「もっと積極的になって、真剣に勉強せよ。」の一言に集約できるようです。

結論

大学進学動機は、58年度生において「就職」型の学生が増加したようです。因みに50年度生のそれは49年度生に近く、「就職」型の学生の増加は最近の傾向と思われまます。

総合科学部選択の理由に、49年度生と58年度生との間には大きな差は認められませんが、「専攻したい学問分野の用意」と「入学後の専攻分野の決定」を挙げた者が若干増加しています。

大学院進学希望者は、49年度生のそれが52.8%であるのに対し、58年度生は27.1%となり、49年度生には男子が多かったことを差し引いても、大幅に減少していると言えます。50年度生のそれが42.3%であることを考え合わせると、大学院進学希望者は徐々に減少している傾向があります。

教官の総科生に対する印象は、概して良いとは言え

ず、勉学に対するより一層の努力が期待されていると言えるでしょう。

最後になりますが、私はこの記事を書いていて何か不安になってきました。たしかに就職のことを考えていても良いし（それが当然であるかもしれませんが）大学院に進みたいなどと思っていなくても良いのです。けれども私は、せめて教官の総科生に対する印象の中に、「遊び人、だけど勉強も忘れない。」というようなものを、せめて一つぐらいは見たかったように思うのです。そこで皆さん、偉そうなことは言えないけれど、もう少し勉強してみませんか？

次回は、専攻したい学問分野と、希望する職業の変化について報告したいと思います。

(文責・竹下 斉)

新気淳二の飛翔批評話 ①

(ヒジョヒジョバナシ)



「当店はお子様メニュー専門店でございます」



2) 総合科学部「10年目」の問題点を探る

— 教官アンケートを中心に —

1. プロローグ

昭和44年を頂点に全国的に起こった大学紛争はいうまでもなくこの広島大学へも波及し、学生側の行動に行き過ぎがあったという問題があるにしても、そこでは大学内に山積みになっていた多くの矛盾が指摘され、大学側も学生の問いに答えるために自らの研究、教育のあり方を反省し、「大学改革」と真剣に取り組むことを余儀なくされた。ここから生まれてきたのが「統合移転」と「総合科学部」創設という2つの構想であった。

これを「教養部改革」の視点からみると、教養部では急激な学生数増加に教官数、施設、研究費等が全く追いつかない状況であり、また一般教育と専門教育とが有機的に結びついたタテ割りの一貫教育も理念として存在しているだけで実現できない状態にあった。これらの問題を解決するためには、教養部の改組・学部昇格と「タコ足大学」という言葉に象徴されるような分散したキャンパスを一か所に集めることが不可欠だったのである。

それではなぜ教養部が「総合科学部」にならなければならないのだろうか。それはいうまでもなく単なる学部昇格というだけでは文部省が納得しないとの理由ばかりではなく、当時の今堀誠二教養部長（現広島女子大学長）が自らの教育の理念を実現しようとする情熱が生み出した構想でもあったのである。（その理想がどのようなものであったかは後のインタビューのページに詳しいのでそちらを参照されたい）そして、ともかくこの構想は昭和49年7月の「総合科学部」発足をもって一応の実現をみるのである。

2. 「悩むパイオニア」

昭和52年春、4回目の新入生を迎えて全学年がそろい、総合科学部（以下「総科」）は学部として形が整った。この年、中国新聞に「悩むパイオニア—広島大総合科学部」と題する連載記事が載った。これは1つの事件を契機としている。それはこの年の3月に環境科学コース3年生25人全員が連名で出した「コース改革要望書」であった。引用すると「女

子学生5人を含む3年生全員の連名で、『改革要望書』が学部長、各教官あてに提出された。要旨は『環境科学といいながら、実際は数学、物理、化学、生物、地学を“幅広く”ら列しただけの「第2理学部」にすぎない』というものである。要求の骨子は、環境科学に立脚して①教官を充実させる②カリキュラムを再編成する—だった。「だが、コースの大半の教官は『新しい学問だからこそ、数学から地学まで幅広い基礎のマスターが必要だ。公害をやるのが環境科学ではない』と譲らない」ここでは「学生にだけ総合化の作業を押しつけるのはおかしい」という不満を紹介してあるが、こうした不満は現在でも環境科学コースに限らず総科生全体に根強い。

この記事を実第1回として7回の連載でこの特集は完結したのだが、第2回では「教養部体質の温存」第5回では「新しい教官と土着派の教官の分離」など未だに残っている総科の問題点を指摘している。

なお、その当時にはまだ顕著でなかった問題を1つ指摘しておきたい。というのは、せっかく新しい学部の理想に燃えてやってきた人材が、看板と中身の違いに失望して他学部、他大学等へ転出してしまいう傾向が次第に大きくなってきているということである。「悩むパイオニア」にイメージアップ人事として紹介された教官もすでに何人もこの学部を去ってしまった。



3. 教官アンケート

『飛翔』編集部では総科のかかえるこうした様々な問題に関する教官の意識を探るため、今年の6月、総科の全教官222名にアンケートを行ったが、回答を得たのはわずか30名であった。これはおそらく質問肢のつくり方が悪かったためであろうが、編集部にとってはショッキングな数字であった。したがって統計としては全く役に立たないが、総科の問題点を指摘していく上である程度有効であると考えられるので、以下この資料をもとに若干の考察を加えてみたい。なお、回答を得た教官30名の内27名までが学際的研究に高い関心を寄せている人々であることをおことわりしておく。

a 学際的研究・共同研究の実態

ここではまず学際的研究のメリットとして考えられていることを挙げてみよう。(カッコ内は回答者の所属コース名)

- さまざまに表出する社会的問題と研究課題ははじめからひとつのデシプリンに沿って発生するものではない以上、関係領域と共同でアプローチしなければ解明できない。(社会)
- 従来の各専門分野で見落していた問題や解決しにくかった問題について学際的にやることによりヒントを与えられ、かつ総合的に見られるようになる点に意義ありと思う。(環境)
- Big Science になるので個人ではできない大きな仕事となる。(環境)

それではこのような意義をもつ学際的な共同研究だが、総科内部における実態について問をもうけたところ、半数以上が無回答、あるいは「知らない」「わからない」という回答であった。回答のあったものを挙げると

- ほとんどなされていない。狭い分野にとじこもった教官が多い。(情報)
- プロジェクト研究(問題解決研究)に不慣れた研究者が多くてむずかしい。(環境)

といったものがほとんどであるが、中には次のようなものもある。

- 講師以上の各教官は従来の専門分野に固執し、いまだに壁を感じるが、若手助手や大学院生を介して少しずつは学際的な共同研究へ近づきつつあると思う。(環境)

これらの回答が示しているものは総科内における共同研究のあまりの低調さであろう。学際的研究に関心をもつ教官でこのような状況なのであるから、

後は推して知るべしであると思う。看板を見て入って来た教官や学生が失望するゆえんである。

b カリキュラムについて

カリキュラムについての意見で最も多くを占めたものは次のような意見に代表される。

- 分野がバラバラで知識が身につかない。基礎をよく教えられるカリキュラムにすべき。(情報)

このことはまさに総科のカリキュラムの最大の欠点であると思われる。なぜなら学問の基礎ができていないということは、総科の教育の目的である — とは考えない人も多いと思われるが — 学際的研究者の養成にとっても、これを可能にする条件を奪っていると考えられるからである。しかし、中には楽観的な意見もある。

- 広く浅く学んでいる。良いことだ。専門分野のことについて教育できないが、学部段階ではそれでよいと思う。(環境)

また、教養部改革の一つの目的でもあったタテ割り教育について次のような意見がある。

- 教える側からみて一般教育ではほとんど総合科学部生に接しない。専門教育になってはじめて接触が生まれる。一般と専門の一貫教育にはほど遠い。(社会)



c コース、群等の組織について

現在のコース編成については「うまくいっている」「現在の日本の大学においてもっとも工夫されている」という肯定的な意見もあるが、多くは何らかの形で組織の再編成を望んでいる。

- コース間の壁が厚すぎる。このままでは総合科学部〇〇学科とでも呼んだ方がいい。(社会)

- コース、群を再編成する必要がある。数名の教官群でびったりするものにした方が機能的である。(情報)

- 理科系は一本にまとめる方がよいでしょう。文系、特に地域は総合科学部の特色を出す様に考え直す必要があります。(情報)
- コースのエゴ、群のエゴ、系のエゴを取除いて“真の総合科学をする場”にすべき。教官団の意識の変革が必要。(環境)
- d 総合科学部の果たすべき役割
これまでみてきたように総科は多くの問題をかかえている。中には「名前倒れ、見かけだおしのところが多く、このままではジリ貧になる恐れが強い。中興の祖があらわれないと没落する」という切羽詰まった感想をもつ教官もいる。それでは総科のこれからの方向性はどうか、総科の果たしうべき役割は何か、我々は何をすべきなのかを考えてみたい。
- 他の専門学部、単一のディシプリンでは追求できない課題を大胆に取り組むことが重要。プロジェクト研究の推進が必要。(社会)
- 環境問題やエネルギー問題、情報の時代、国際問題など、いずれも総合的で学際的な研究課題との取組で第一線の仕事をすべき立場にあると思う。(環境)
- 広島大学は工学部など一部を除いて現実的なものを行っている所が少ないので総科でカバーすべき。(社会)

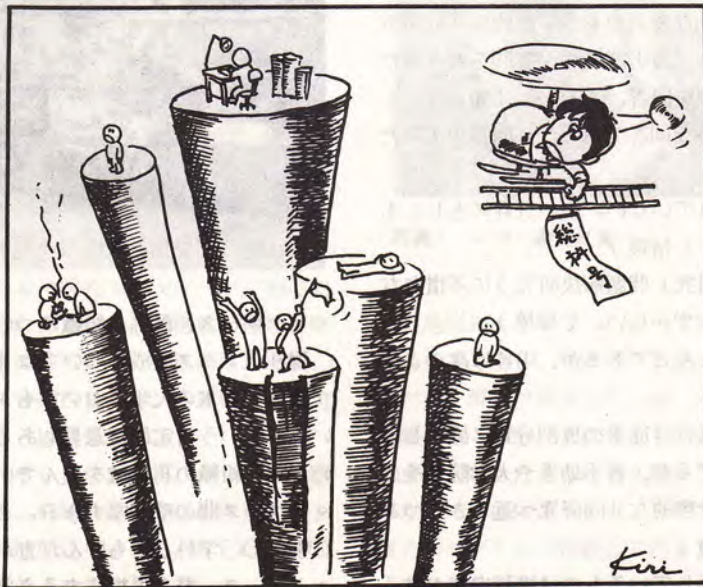
- ①地域社会に奉仕する学問の創造。
- ②国際社会に出て恥しくない人間の育成。(地域)
- (学生は)先生方を利用して学際的研究をやる芽生えを創ってほしい。若い人がやるべきことだ。(環境)
- 国際性、総合性、現代性にかなる研究テーマ。(社会)

4. エピローグ

上記にみるように総科の役割とは学際研究、共同研究の推進であり、それを欠いては存立基盤を失ってしまうといえる。このことはとりもおさず総科の設立の理念に立ち返ることを意味する。我々は何度も原点を振り返って自分の位置を検証し直さなければならない。そして、まさにこうすることによってのみ総合科学部の将来に向けた発展が望みうるのである。

(文責・山田 順二)

斬気淳二の飛翔批評話 — ②



「はて、どこにはしごをかけるかな」

3) リベラル・アーツ・カレッジを目指して

— 今堀誠二初代総合科学部長にきく —



今堀誠二。大正3年生まれ。昭和14年広島文理科大学史学科卒業。昭和20年広島文理科大学助教授。昭和26年広島大学皆実分校（後に教養部に改組）教授。昭和47年広島大学教養部長、49年総合科学部の発足とともに、初代総合科学部長となる。この間、内閣官房国際問題懇談会委員のほか、数々の委員及び外務省特別研究員を歴任。昭和52年より広島女子大学長。55年には第70回日本学士院賞受賞。広島大学名誉教授。文学博士。

1. 総合科学部をつくった動機

まず、どうして総合科学部を作ろうとしたかということなんですが、昭和24年から25年にかけて新制大学が発足し、24年には私学が一部発足したわけです。25年からは国公立が発足したんですが、当時は正直言って、言い過ぎかもしれないけれど、かなり占領軍命令でそくさとやったために、たくさんの欠陥があることは否定できないと私は思っておったわけです。ただし、同時に私自身は、新設大学ができる前は広島文理科大学の助教授をしていました。ですから旧制大学にずっといたわけで、黙っておれば、そのまま新制で言いますと文学部に移る状況になっていたんです。ですけれども、あえて教養部に出て、そして新しい大学をなんとかしようという気持ちになったのは、大学を卒業しましてしばらく中国の大学にいたのですが、外から日本の旧制大学を眺めてみた場合に、日本の大学ではリベラル・アーツ・カレッジとでもいうものが欠けている。たとえば、ハーバード・カレッジ、コロンビア・カレッジ、あるいはステートユニバーシティのリベラル・アーツ・カレッジですね。ああいう、極端に言えば一般教育を四年間やるような学校が、実はアメリカでは中心になっている。ですから、工学部と言いましても工学部というのは大学院が中心です。むしろコロンビア大学の工学部というのがありますが、この場合工学部というのは、むしろ日本流に言いますと専修学校みたいなものなんです。本当の工学部は、コロンビア・カレッジを出て、その上のテクニカル・スクールに行くわけです。ですから、ビジネス・スクールとかロー・スクールとかいうのはみな、いわゆるマスター・コースなんです。その前にきちっと一般教育をやっておく必要がある。工学で言いましたら、工業技術というのは、要するに物理現象か、化学現象か、生命現象か、この3つのどれかを扱う科学なん

です。この2つ以上の組み合わせも考えられます。しかし物理学なら物理学をきちっとやらないで、技術だけをやっても、それは単なる応用であって、本当の独創的な研究はできないわけです。

2. 日本の旧制大学の体制

それは物理学でも同じことが言えるわけで、日本の旧制大学では、非常に狭い、例えば××研究室に入れば、同じ物理でも△△研究室へは出入りしないわけでしょう。広島文理科大学の、微晶学の講座に入りましたら、微晶学しかやらないわけです。そういう非常に狭いワク組みしかやらないことでは、本当の物理学者など出ない。湯川さんの素粒子論はやはり一種の哲学ですからね。あそこまで行くためには、数学なら数学がきちっとできていて、そして哲学ができていて、物理学ができなければならないのでしょう。

3. アメリカのリベラル・アーツ・カレッジ

その辺の基礎をやるのがリベラル・アーツ・カレッジなんです。アメリカあたりで、例えばノーベル賞の話をしみますと、大学単位で「あなたの大学には何人ノーベル賞受賞者がいますか」という様な質問をしてくるわけです。というのは、コロンビア大学では15人とかハーバード大学では28人とかいう風に向こうでは大学単位で数えていますから。つまり、日本ではノーベル賞というと、えらいことの様ですが、向こうでは当たり前のことなんです。そういうところまで行く根本的な原因は、一般教育がしっかりしているということなんです。リベラル・アーツ・カレッジがしっかりしているということです。リベラル・アーツ・カレッジというのは、いわゆる一般教育みたいなのがずらっとあって、もちろんそれ以外に工学に進みたい人間は工学の単位もとれるのです。数学をやりたい人は数学を比較のたくさんとるわけです。しかし数学だけやった

のでは数学は伸びないというのがアメリカ式の発想なんです。物理学ではこう考える、化学ではこう考える、ならば数学ではこう考えることも出来るんじゃないか、そういう新しい発想が出るのが、「比較」の効用なんですね。私は歴史学ですが、歴史学を考えていく場合に、経済学ではこう考えるじゃないか、それならこの問題はこう考えた方がいいじゃないか、という発想が、経済学をしっかりとやっていると出ででしょう。法律学の体系や研究法から学ぶことも出来ます。ですから法律学とか社会学とか経済学とか哲学とか、そういうものをしっかりとやて行く。しかもそれをちょっとやるだけじゃないんです。かなり深くやって、それを副専攻にして歴史学なら歴史学へぐっと入っていくというのがリベラル・アーツ・カレッジの特色です。それでアメリカでは非常に学問が伸びました。アメリカだって、ノーベル賞をとるような人が出たのは20世紀に入って、それも10年代以後です。それ以前は、学問的にはヨーロッパに比べてずっと劣り、学問上では植民地だったようなものですからね。

4. リベラル・アーツ・カレッジと教養部の違い

日本の旧制大学の欠点を直すため、新制大学は一般教育をとり入れ、リベラル・アーツ・カレッジにする考えだったと思います。広島大学で言えば、教養部がその担当部局となりました。だからその教養部をしっかりとしたものにして、日本の大学を国際水準に負けないだけのものにしたいという考え方で、私は旧制文科大学からわざわざ教養部に移ったのです。ところが実際に教養部に移ってみますと、教養部にはいろんな原因があるんですけども、アメリカのリベラル・アーツ・カレッジとは本質的に違うということがわかったんです。例えばライシャワー教授（この日本史の教授が、駐日大使として大きい仕事をしたあたりも、リベラル・アーツ・カレッジのすぐれた特色を示すわけです）はハーバードの一般教育の教授です。アメリカの高名な教授の中には、一般教育の教授が実に多い。壮々たる教授が一般教育にずらっと並んでいて、それが学生を鍛えるわけです。その代わり、その学生諸君も非常に勉学意欲に燃えている。例えば、みなさんでしたら先生が休んだらもうけたと思うでしょう。ところがアメリカの大学では儲にならないんですよ。例えば、今日僕が病気になって休講したとしますか。そうしたら、その分は7月11日に授業やるから出て来て、と必ず申し出るわけですよ。もし申し出なかつ

たら、学生の方から授業料を払っているんだからと、補講を求めるわけです。そういうわけで、きちんと鍛えますよ。鍛えますが、鍛えるだけの中味というものがやはりあるわけです。それから、まず授業開始に先立ち、その一年間の講義のレジュメを、印刷にして出しています。一年間にこれだけのことをやるっていうのを予告していますから、必ず終りまで講義します。レジュメは100ページ以内ですが、講義計画だけは分るわけです。そういうことで、学者として第1級の教授が、学問的な体系に即しながら、立派な教授法に基づいて教えるのが向こうのリベラル・アーツ・カレッジです。これに対して、日本の一般教育というのは、言うならば、おざなりになっています。

5. 一般教育の問題 ①基礎教育と一般教育の混同

講義計画とか碩学鴻儒の教授陣のことは別にして、日本の大学ではどこでも基礎教育と一般教育を混同している。これが第一の問題点です。例えば工学部に行く学生が、工学部に行くための準備として物理学なら物理学、化学なら化学をやる。これは基礎教育です。もちろん、そういうものも必要ですよ。しかし、一般教育っていうのはそうじゃないのです。一般教育というのは工学部の授業を受ける準備として力学なら力学をちょっとかじるのではなく、力学の本質、その学問体系を、その方法論を、本格的に勉強させる。工学部の学問体系にチャレンジできるだけの力学を、がちっとやるということなんです。当然その単位数は4単位とかそんなものではないのです。工学部へ行く学生で、物理学を主な武器にしようという学生ならば、20単位も30単位もとるわけです。そうでなければチャレンジできません。理学部の物理学専攻の学生と同じく物理学を議論できるところまでマスターするわけです。先生の方も必ずそこまで鍛えるわけです。そこまで行かないと、工学の面で伸びないわけです。一般教育を本格的にやるかどうか勝負の分れ目になる。しかし、日本の場合はそうではなくて、基礎教育と一般教育を混同して、基礎教育だけやり、一般教育は欠落しているわけです。

6. 一般教育の問題 ②演習や実習の軽視

それから、第二に演習とか実験とかいうものを軽視して、講義だけで単位数だけ揃えているという欠点があります。

日本の大学の単位制度というのは本来から言うに一時間の授業に対して、3時間の予習復習を必要と

する、というたてまえになっているわけです。もしもそうであったら、一日に授業以外に勉強を8時間するとしますか。これはすごいですよ。毎日ですから。日曜日は休むとして、 $6 \times 8 = 48$ 時間、48時間の1/3の16時間分の授業しか受けられないことになります。本来それだけの自習を必要とするわけです。アメリカの大学では、だから、授業よりも自分で勉強することが中心です。授業についても演習と実験が中心なんです。演習では、毎時間、毎時間当たります。実験なら毎時間やらねばなりません。だから、実験、演習を真剣にやって、それを基本に自分で勉強して、学問の本質を考え、技術を覚えるわけです。ただ、物理学の授業を聴くだけだったら、これは本を読んだ方がましだし、むしろその方が正確です。僕らだって、授業で喋っているよりは、書いたものの方がより正確に、学問を伝えています。どうしてかと言えば、書物にする時は何回も推敲しますから。中味は同じですが、何回も何回も推敲していれば、より正確になるでしょう。だから、講義だけだったらテキストを読んだ方がよっぽどいいんですよ。だから、今のように、演習とか実験が基本になっておらず、学生が自分で考え、自分で知識を身につけることが中心になっていないというのは大きな欠点です。

7. 一般教育の問題 ③学問の位置づけ

それから第三には、リベラル・アーツ・カレッジの特色はやはり学問の位置づけにありますか。例えば数学なら数学をただ教えるのではなくて、一体数学とは何かについて、数学の思想とか数学と他の諸学の比較とかを通じて考えさせることが大切でしょう。数学というのは本質的にこういうものだから、そのための研究法とか、問題の作り方とかを勉強して、数学のあり方を考えるようにしなければいけないということがあります。これを簡単に申しますと、総合的に勉強するということです。ヨシのずいから天をのぞくのではなくて、数学を見る目と、物理を見る目はどこが違うのか、あるいは歴史を見る目とどんな点で共通しているのか、ということなんです。このような総合的な勉強をしていると、将来何を専攻する場合でも、数学が役に立つのです。そういう授業を、日本の教養部の先生がやっているかどうかの問題なのです。

8. 教養部の問題 ①タテ割り授業の必要性

それで私なんかは、一般教育の確立をやかましく言ったんですが、ところがそれがそうはいかなかったのです。どうしてかと言いますと、教養部というの

は初めから、各学部の下に置かれ、各学部の指示によって一般教育を実施するしくみになっていて、各学部は基礎教育だけを要求してくるんです。それに制度上のことも、制約になっています。工学部の学生が物理学科の学生とひけをとらないぐらい単位をとって、そうして卒業するということは、たて割りでないときません。たて割りであれば、もちろん物理学を一度に数多くとるわけではなく、一年生の物理をとり、二年生の物理をとり、三年生の物理をとり、四年生の物理をとるのです。もちろん実験も全部やるわけです。そうして、初めて理学部の物理学科の学生と対等にできるわけです。それが教養部では4年まで授業ができない。二年間で、しかも基礎教育という形でやっていたんでは絶対できないのです。だから、4年制のリベラル・アーツ・カレッジにしなければいけないのです。よこ割りの教養部では、リベラル・アーツ・カレッジ的な教育は絶対できないと言うのがまず基本的なことです。

9. 教養部の問題 ②劣悪な研究条件

第2には教養部というのは研究条件が非常に悪いのです。私も教養部に移ってから始めてそれを知ったのです。私が旧制文理大にいた時に年間使っていた教官研究費に比べると、教養部に移ったとたん、図書購入費は4分の1に下がってしまった。それでは必要な本が買えないわけです。だから演習がなぜできないかと言えば、文理科大学では6人学生がいたら6冊本を買うことができた。一冊ずつ渡して演習したわけです。一年間に読ませる本をきめて、それを全部そろえて渡すのです。そういうことで、演習をやるだけのお金はあったわけです。ところが教養部では何百人の学生がいるのに、そうした費用が全くないわけです。それから教官数が非常に少なくて、文学部の東洋史は5人枠ですが、教養部は1人だから、アジアの全域をカバーすることができないしくみになっているんです。法律学で言えば、民法、刑法などの六法があり、研究法的には法律解釈学と法律社会学があります。六法の専門家、また法律解釈学と法律社会学の両方の先生がいて、それぞれの法律というのはこうだということをきちっと教え得るのだければ、これは嘘です。経済学でも、経済学部なら30人、教養部は1人しかいなかった。理論だけでもケインズとか、サミュエルソンとか、いろんな理論をやる人がいるでしょう。しかし、そのケインズの経済学をいくらやっても、それはアメリカの現実の経済というものをどう分析するかということができなければだめです。財政学とか、経済類型論とか、あるいは

は銀行論とか、そういうものが実際にあって、そして金融はこういう風になればこうなるとか、国際経済論なら国際貿易はこうすればこうなるとかという風な現実的な問題をそこにもちこまなかったら、いくらケインズの『一般理論』を説いてもつまらないのです。それはマルクスもそうです。いくら『資本論』の解釈学をこまかくやっても、それだけではだめなのです。その『資本論』によれば現実の日本問題があるいは現実のソ連の経済が、どう理解でき、また変動させ得るかということが問題でしょう。そうすると、経済学を体系的に学習する上で、教養部の教官組織は全く役立つ条件にないのです。たった1人で何ができるかです。現に、当時の政経学部から、再三、お叱りをうけていたわけです。外国語でも中国語の専任教官がゼロという現実が、かなりつづいたし、ロシア語も理学部から強い要望が出て、初めてやっと1人の枠がとれました。教養部が主張しても全く無視されていたのです。教養部では一般教育が実施できるようになってないわけです。制度的にもなっていないし、研究的にもなっていないし、人数の面でもなっていない。だから教養部ではだめだということになったわけです。

10. 教養部の問題 ③学生側の側からみた問題

広島大学はスタート以来、教養部がずっとガタガタしまして、いつも問題を起こすということがありました。学生諸君から言うと教養部の授業は、高等学校の繰り返しでつまらないと言うわけです。もっともこれは学生諸君の方にも責任があって、それなら先生の方へ注文をつければよいわけです。一般教育と言えだけの教育を、4年間分やってくれと言えばよいのです。それだけの迫力もないのです。勉強よりもレジャーを楽しむ方が面白いから、教養部はつまらないことを口実にして、遊んでいる学生もいました。生物学で言いましたら、生物学は今どんどん進んでいます。例えば分子生物学がやりたければ分子生物学の最も進んだ教科書を持って行って、これの講義をして下さいと頼めばよいのです。すると教官は、まずその前提に、これだけの生物学、化学、物理学の勉強をせよと言って、4年分のカリキュラムを示したでしょう。一般教育が本当に学生諸君の満足できるものになってないというのは、私は基本的にはもっともだと思いました。だから、教養ゼミをやったり、総合科目を作ったり、あるいは湯川秀樹氏の講演会を開いたり、出来るだけのことはやりました。しかし、結局は教養部を

廃止して、いわばカレッジというものを作る必要があるという結論に達し、総合科学部というものを作ったのです。

11. 総合科学部が実現したもの

そうしますと、総合科学部がリベラル・アーツ・カレッジになったかどうか、ということはあとの議論にしまして、少なくとも総合科学部プロパーの学生としてはたて割りです。例えば英文学をやりたいとしますと、文学的な英文学を四年間やるだけではなくて、例えばコンピューターを使った情報科学も四年間やれます。コンピューターを使った英文学の分析をやるのが可能です。やる気があれば心理学をマスターして、シェークスピアに迫ることもできるわけです。ですから、その四年間でさっきのような形でリベラル・アーツの勉強ができるような学科にしたいということがまず第一です。つまり一般教育がやっと生きて来たことがまず第一、そして、第二が、専門教育の面で、環境科学とか地域研究とかを専攻し、学際的にやって行くのが大方針になっているのです。現在世界の学問というものは、急速に学際的な方向に進んでおり、また、その方向でやっていくことが一番成功するし、それが人類社会のために非常に役立っていると私は思うのです。ノーベル賞を例にとるならば、以前は医学とか物理とか、狭い専門にとじこもった人が多かったのですが、今頃は学際研究が大部分です。ですからノーベル賞をとらない関係ないのです。学問というのは、本来そうあらねばならないと私は思っています。

12. 学際研究 — 自身の経験から

私自身について言えば、私が一番お世話になった先生というのは仁井田陸教授という先生です。この方は東大の法学部の先生です。法学部の先生ですから、当然法律学には詳しいのです。私は先生から法律学を学び、これを一つの武器にして歴史学に切り込んでいきました。だから、他の人たちがとても思いつかない様な問題意識、資料、分野、方法を見付けて、新しい論理を組み立てるわけです。しかもそれは単に法律学と歴史学の学際的な、あるいは総合的なことをやったというだけでなく、私は中国研究が中心ですから、中国とは何か、ということ、従って中国と日本の関係はどうあるべきか、一言でいいますと、日本と中国は、世界で一番仲の悪い国だったわけですが、それを世界で一番仲のよい国に代えることに成功しました。かって日本は、中国を敵視し、その結果全世界を敵にして、そして完全に

負けました。今まで私としては政府に働きかけて、日中友好関係の実現にずいぶん努力してきました。日中友好と言え、今でこそみんな日中友好と言いますが、私がやっていた頃は昭和20年代、30年代で、日中友好といえば“アカ”と言われました。向こうは共産主義の国ですから。しかし日中友好は、結局私達が努力して実現したわけです。実現した結果、どうなったかと言え、日中友好関係ができる迄は、日本はアメリカの属国だったのです。それは歴代の総理大臣は、総理大臣になるとすぐにアメリカへ行きました。何でもアメリカの言うことは御無理御もっともです。その御無理御もっともをぶちこわす方法として日中友好を考えました。どうしてかと言え、日中友好ができれば、資本主義対社会主義の、第三次大戦が防げるからです。ソ連と中国がひとつだったら、アメリカはどんなに頑張っても絶対に勝てないのです。ベトナム戦争がその実例です。中国とソ連が一体化すればアメリカがどんなに強くても歯がたちません。勝つということがわかっていれば、ソ連がアメリカに対して核攻撃をしかける可能性があるでしょう。世界戦争になる可能性が充分あるわけです。そのようなことをさせないためには日本と中国とが仲良くする。そうすればソ連と中国が離れる。そうする以外に、日本の安全保障の道はないわけで、日本がソ連の核攻撃をさけるには、東西の核戦争を回避するしかない。日中の平和が世界の平和の前提です。日本は世界が平和であってはじめて世界から原料をもらってきて、それを世界に売って暮らしていくことが出来る。だから日中が戦うような条件をつくるか、日中が平和なような条件をつくるか、それは我々の努力であって、そのための細かい計画を全部立てなければダメなんです。ただ単に日中友好と言っても、それは馬鹿の一つ覚えであって、何にもならないんです。だから政府に計画書を持って行って、こういう風にして、日中の国交を結びなさい、というところまで持っていったのです。

13. 総合的な研究が必要な時代

そういうことができるというのはつまり歴史の本質を知っているからなのです。学際的な研究の成果です。もしも私が狭い意味の歴史学者ということであればできません。しかし同時に狭い意味の法律学者だったらこれもできません。学際的なもの、つまり総合的なものがどれだけ意味をもっているかということは明らかであって、そういうものが今日

の研究の中心であるということです。私の弟は、東大にいました。最初は理学部において、それから農学部の教授になって、医学部の教授になって、今は老人科学をやっています。本人の専攻は、分子生物学です。分子生物学というのはもちろん理学部の領域ではありますけれども、農学部や医学部でもそれをやらなければどうにもならないわけです。ですから医学部からも来てくれと言うし、農学部からも来てくれと言うし、高齢化社会の対策にも不可欠というわけです。ですから、今まさに総合科学の時代なのです。学問というのは。だから総合的にやらなければいけない。そしてそのような総合的な勉強ができ、本当の一般教育のできるような学部を作らなければならないというのが総合科学部を作った理由です。そういう学部は、他には大阪府立大学にあるだけです。東大の教養学部はそういう風にはなっていない。我々が総合科学部を考えて実現しようとした意図は、そこにあるのです。

14. 大学改革の必要性

これは何も特別な問題ではないのです。昭和25年に広島大学ができ、全国の新制大学ができた時は、言うならば、どさくさの時代でした。だから、その当時としてはいろいろ不完全なことがあってもしかたがなかった。しかしその不完全なものを後生大事に何年たっても変えないのです。その点では、東大、京大に大きな責任があります。ああいう大学が変えなければいけないのです。ところが、全く一般教育不在に気付いていない。だから、けしからんと言うわけです。それで広島大学が非常に強くこの点を主張して総合科学部を作ったのです。

15. 政府首脳や各省の高官との直接交渉

正直なところ、この理屈は誰も反対できないのです。ですから、その話を総理大臣なら総理大臣に持っていくと、「それはよい御意見だ。」「その通りやりましょう。」ということになります。だから実現したのです。計画が良かったのです。では、どのようにして総合科学部ができたかという、勿論、教養部教授会の賛成があり、当時の飯島宗一学長の強力な支援があって、とにかく広島大学の協力が得られたからですけれども、直接的には当時の文部省当局、とくに木田宏事務次官、井内慶次郎大学局長、大崎仁大学課長、川村恒明課長補佐らが、「大学はぜひこうあるべきだ。」と主張されて、この計画の実現に全力をあげて協力下さったおかげです。むろん、大蔵省主計局や行政管理庁の中にも強力な支持者があり、例

えば、学部創設時に教官、事務官あわせて116名の定員増が認められるなど、空前のことだったわけです。これにはまた、佐藤栄作首相、竹下登官房長官、福田赳夫蔵相なども協力して下さったし、首相秘書官の楠田実氏が大活躍下さった。実は、私は総理大臣の諮問機関だった、国際問題懇談会というものの委員をやっていた関係で、こうした政府首脳や各省の高官と面識があったのです。大学で何か新しい学部を作る場合、まず東大に作るわけです。どんな場合でもそうです。まず東大で実現して、次に旧制帝大系大学に及ぶのです。それから広島大学などの旧単科大学系の大学に移って、最後に旧専門学校からスタートした大学に行く。こういう順序が決まっています、広島大学からやるということはそれまで一度もなかったのです。総合科学部案が提出され、その年にすぐ実現したのは特に異例です。それはもう総理大臣以下、積極的に協力して下さり、特に井内局長の努力が大きかったからです。だから予算をばんとくれたのでしょう。総合科学部ができると同時にドクターの予算をつけてくれたのも、こうした背景があったからです。普通でしたら最初に学科目予算でスタートし、マスターができた時にマスターの予算がつき、ドクターができてからドクターの予算をつけてくれるのです。私はそんなことでは立派な教授が集まりはしない、と言って頑張ったのです。立派な先生に来てもらうためには、初めからドクターの予算をつけろと言ったのです。そうしたらばんとつけてくれました。それから教官定員はくれても、事務官はふやしてくれないのが普通です。広大でも、後、いろいろ学部ができたでしょう。生物生産、学校教育ができ、法、経が分れました。事務員はおそらく、一人もついていないでしょう。総合科学部では50人ついているのです。それはみな、そういうことで上の方から、指示が来たのですから、何とかやれたわけです。このように普通だったらできないことができたのは、文部当局、各省庁、政府上層部に太いパイプがあったからということでしょう。

16. 総合科学部をつくるときの困難について

作る課程で、どのような困難をのりこえなければならなかったかという点については、実は、それ程困難ではなかったのです。どうしてかと言いますと、まず、総合科学部をつくろうということに対して、広島大学の内部のどの学部も賛成しませんでした。

ですが、従来各学部の自治という原則があるのです。例えば、工学部が新しい学科を作るとします。その時に教養部の許可をとるかといえば、そんなことはありません。というのは新しい学科ができれば、1、2年生は教養部が持たなければなりません。教養部が「ノー」と言えばできない筈です。しかし、それは言えないわけです。というのは、大学というのは学部自治というのが原則であって、工学部の方で学科をお作りになるとおっしゃれば、教養部はそれに反対できない。それぞれの学部で決めれば、それに対しては文句を言えないというのが、大学の自治の原則です。ところで教養部が総合科学部を作ろうじゃないかと決めた時、他の学部は、1つも賛成じゃなかったのです。全部反対でした。全部反対だけれども、それは要するに外野席であって、学部自治ですから、当時の教養部から総合科学部をつくりますという予算案を持っていけば、他の学部は断れないのです。それを文部省にあげていけば、こちらは広島大学と違って、全く好意的でした。更に総理大臣も大蔵大臣も皆了承しているのですから、すぐびしゃっと決まるでしょう。これは笑い話として申しておきますが、広島大学の各学部は皆反対だったにもかかわらず、予算を出すことに関しては余り文句を言わなかったのです。それは文部省を通らないだろうと思っていた人が多かったからだと思います。書類を出して一度で通るということは、まず絶対にはないのですから。ですけれども、私が教養部長になって総合科学部を作る迄の2か年間で作ったのです。最初の一年間は大学紛争の大騒ぎで、もう教養部の教室が十数回も占領され、授業も満足にできなかった。そういう大混乱で何もできなかったのです。次の一年間で総合科学部の案を作って出したのです。一度で通ってしまいました。それは、今のようなわけで、上の方に皆パイプが通っていたからです。したがって、各学部が全部反対だったけれども、一発でできたので、困難はなかったというわけです。なお、大蔵省主計局次長等を歴任した村上 一氏が、大蔵省、行政管理庁をまとめて下さったことを想起し、その友情に感謝する次第です。

次号では総合科学部の現状について、先生にお話させていただきます。乞う御期待。

(文責 山田 順二)

4) 他学部教官に聞く

物事を考える時には、視点の変化が必要となる。今回の特集の1つとして、外から総合科学部はどう見えるかを知るため、法・文・理各学部の教官にインタビューをお願いした。

『総科は今、過渡期にある』

法学部 北西 允 教授

- Q：学際が目的の総科自体をどうお考えですか。
A：賛成です。学問の専門分野はかなりせまく固定されている。社会の発展につれて学際研究が必要になってきます。
Q：広大の総科の現状については……
A：新しい構想にふさわしいスタッフがいるかは別問題として、それなりに努力はしてきたと思う。
Q：総科設立の理念とはズレているのでしょうか。
A：過渡期としてはやむをえないと思います。が古くからいる人と新しく来た人の、総科に対するイメージの間に必ずしも意志統一があるとは思わない。
Q：足なみがみだれているという事ですか。
A：そういう事が言えるのではないのでしょうかね。が、これは過渡期的現象としてやむを得ない。また各々の先生が総科創立の理念にそった研究・教育をやっているかどうかには少し疑問を持ちますね。極言すれば、総科では統合の機能は学生に委ねられているのではないか。学生の負担が重い、という印象です。
Q：法学部との研究分野の重なりについては……
A：現実には総科の方で、講座やカリキュラムに重なりがないよう配慮している。同じ講座名は無い。
Q：でも内容は同じでは……
A：だから総科がもっと総科の理念に則した、研究教育を目的意識的に追求してもらいたい。
Q：つまり総科も従来の学問の際を破っていないという事ですか。
A：そういう事ですね。学際を指向している、その指向性が不十分だと思う。新しい学問を追求しようという熱意がやや稀薄である。
Q：では総科に対する要望・苦言がありますか。
A：過渡期だから急にこうしろと言っても……。前からおられる先生が定年でやめる頃になると大分変わってくるのではないだろうか。それだけでなく、現在いる人が目的意識的に努力する芽を育てるのが

大切だと思います。

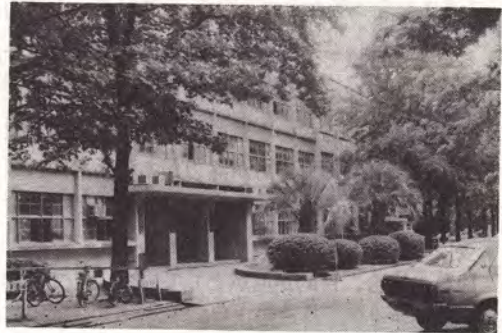
うちの学部では総科に対して比較的同情的です。専門もロクにできないのに、複数の専門にまたがる学際ができるか、と言う人も他学部にあります。

Q：同情とはどういう意味でしょうか。

A：共感(シンパシィ)といいかえてもいい。総科に批判的な人は、新しい学際学問なんて学問ではない、という見方もする。しかし僕はそういう方向を追求することによって学問が発展してきた面があると思う。それに専門の深化も大事だが他方、統合するのも大事だと思う。

Q：総科はまだまだである。という事ですか。

A：そういう印象もありますね。



『総科と文学部の研究に本質的な違いはない

しかし……』

文学部 田中 久男 助教授

- Q：先生が総科にいらした頃の総科の印象を……
A：総科というのは、血が混っているから様々な分野の先生が集っていて、従来の学部ではカバーできない分野がたくさんあるので、そういう面で活力があってもよかったですね。
Q：学際研究についてはどう思われますか。
A：うーん、学際研究というのは難しいんですね。例えばある分野の人が、それにまたがりながら別の分野とのかけ橋となる分野を開拓することで、かな

り時間がかかってしまう。まあ総科の目的にそった卒業生もこれから多く出てくると思います。

Q：総科の頃の授業と文学部の授業では深みが違いますか。

A：総科では専攻でない学生が対象だから基礎的なことを言う必要がありますが、文学部では専門的な色あいが出せますね。

Q：総科での研究と文学部での研究の違いは……

A：本質的には同じで、総科にいたころも米文学を研究していたし、それを授業に出せるか出さないかの違いです。文学部では2～3年間文学を専攻必修の形でやっていくので、知識意欲を刺激し研究意欲を育てるようにしないといけないし、卒業段階で少なくとも専門的に文学をやったというようにしないとダメだけど、総科はその点文学は選択科目の1つですから。

Q：教育面の違いはどうでしょう。

A：総科では必ずしも米文学のテキストだけでなく、エッセイも使用していたし、総科の立場では英語が正確に読めるというのがまず目標になるから、文学作品を読んでも、文学的技術やテーマより、意味を捉えることが目標で、文学部と少し意味が違います。

Q：総科と文学部の学生は質的にどう違いますか。

A：そんなに変わらないと思います。まあ男女の数の差が極端でない総科の方が活力があるかも知れない。しかし英語への取り組みは、目的意識の明確な文学部の方が少し真剣かもしれませんね。

Q：総科の場合、目的が漠然としているようですが……

A：最初の1年間の空白期間という方で積極的に利用すれば、僕は実りの多い期間になると思います。でもそれを漠然と過ごし遊べる期間というようにとると、大学生活の後半に振り返って、非常に大切な1年間を空費してしまったと悔むことも起こるような印象を受けました。



『総科の方向づけが必要』

理学部 市坡 純雄 助教授

Q：総科設立当時の学内はどうでしたか。

A：総科は学園紛争にともなってできた。教養部学生の非常に激しい闘争に、教官等も改革しなければということからできたのだろう。理学部にも共感する人がいました。

Q：学際指向は当時から高まっていたのですか。

A：思想的なものもあると思うが、1つには学部を創設するときの名目という意味もあるのではないかな。また学問的にも学際的という風潮が高まってきた時期でもあり、それにマッチしたと考えることもできる。

Q：理学部にとって総科とは。

A：卒業に必要な単位のうち一般教養の占める割合は大きい。この面においても、総科は重要な意義もっている。

Q：学問分野の重なりについては……

A：学問だからどこでどういう研究をしてもかまわないと思うし、気にもならない。

Q：総科の学際研究をどうとらえていますか。

A：総科の学際は、それぞれ専門をもつ研究者が、広範囲の分野から組織的に集まってできたことによると思う。個人研究は、本質的には従来の学問における研究と同じであると思う。

Q：総科に対する先生のお考えをお願いします。

A：創立10年目を迎えて、ちょうど節目になる時期だから、改めてしっかりした方向づけは必要だと思う。“総科生は一般教養が劣るかどうか”という事に関しては、カリキュラム上の問題よりも学生の受ける態度に問題があるようだ。理学部に関しても同様。一般教養が専門より下位のレベルにあると考えられがちであるが、それは間違っている。特に理学部では専門に行く可他分野の勉強がなかなかできない。総科の学生にもある程度同じことが言えるのではないかな。他学部との関わりを意識しているようだが、あまり気にしないでがんばってほしい。

(文責・櫻井 幹士)

5) ひとことインタビュー

「総合科学部って何？」

「総合科学部？一体何をする学部なの？」みなさんもこういった言葉をいやになるくらい耳にしたのではないのでしょうか。広島大学総合科学部（広大総科）を志望大学、学部にした時から始まり、めでたく合格してからは、親戚や友人に会うたびに尋ねられ、そのたびに、受験案内書などに書かれてあった文句を思いだして説明し、何とか納得させた、などという経験もあるかと思います。

さて、広大に総科が生まれて今年で10年目。総科も広大の一学部として、定着してきたと思われる。では、広大の他学部の学生の目には、総合科学部というのはどのように映るのでしょうか。我々「飛翔」編集委員は、テープレコーダーをもって、キャンパスのあちこちに出発し、他学部の学生に、“総科についてどんなイメージをもっているか”話してもらいました。

- ・「なんで心理を研究するところが総科と教育学部に分かれているのか疑問です。」
- ・「入学するまで総科なんてあると思わなかった。」
入学してからは？という質問に対して「別に……どうしようもないんじゃない？だって、何するの？総科って。しょうがないでしょ。」
- ・「学校の先生しかなくて話も聞きます。」
- ・「総科は学校の先生になる人は少ないでしょ。大学院へ行くしかないんじゃないの？」
- ・「会社の人（求人側）も履歴書見てもピンと来んのとちがうかな。“総科卒”なんていうのを見ても、『いったいこいつは何にたけた人間なんだ』とか……。」
- ・「何やっているのかわからない学部です。」
- ・「あっそうか、というようなダジャレにしかない学部なんですよ。」
- ・「え？総合科学部ってなに？何の団体？……」
…経済学部とかと同じ学部の1つと教えられて「あ、あれ。それなら知ってる。総合科学部なんていうから、クラブかと思った……」
- ・「何でも屋さん。」
- ・「かっこいい学部だと思う。“総合科学”を勉強するなんて。全国に2つしかないなんてとこも。……でも四年間ではとても“総合科学”なんて勉強できんよーな気がするなあ。気合い入れて大学行かな、あんた！」
- ・「おもしろいことやっていると思う。私も総科に入ろうかと思ったこともあったし……」
- ・「六階のトイレの水がでない。」
- ・「パッとイメージが湧いてこないですね。つまり

これが総科の印象ですよ。存在感が無いとか印象が薄いかい……。」

- ・「個性に欠ける。凡庸である。」
- ・「何か中途半端な気がするなあ、僕は理学部の生物やけど、総科やったら環境（環境科学コース）になるのかな、とにかく、どこがどうってうまく言えないけれど、全体が中途半端なことやっているような気がするなあ。」
- ・「1年生の女の子に美人が多い。1年生だけでかたまっている。異常に連帯感が強い。」
- ・「自由なところが好き。個性があるところも。大学生らしいんじゃない？学部のカラーがないっていうのか、何でもやれるという気がする。それから総合科学部って広大のキャンパスの学部だと思いますよ。だって広大にあれがなかったら…ねえ。広大っていったらあれ（総科）と東雲ですよ。絶対。」
- ・「学生が明るい。」
- ・「何をやっているかわかりませんねえ。何か小さな大学っていう感じ。別の世界を感じます。」
- ・「孤立していると思う。」
- ・「いちばん狂っている。なんかバカなことすると『やっぱり総科だ』って感じ。」
- ・「早く西条へ行けばいいのに……。」
- ・「わりといいかげんな所が好きです。」

……
ずらっとインタビューで得た意見を羅列してみました。“何をやってるのかわからない学部”という答えがあまりにも多いのには少々びっくりしましたが皆さんはどのようにお感じになりましたか？

（文責・海堀 修）

6) 「暗い」「堅い」「偉い」!?

～高校生から見た総合科学部のイメージ～

編集部では、これから大学を受験する高校生が、総合科学部についてどのようなイメージを持っているかを調査するため、市内の普通科高校の三年生百名を対象にアンケート調査を行なった。結果は次の様である。(数字は回答者の人数)

(1) 広島大学総合科学部を御存知ですか。御存知の方は、どのようなイメージをお持ちですか。

知っている……67 知らない……33
「何をやっているのかわからない」(15)
「賢い、偉い」(11) 「堅い」(6)
「暗い」(5) 「面白そう」(4)
「明るい」(2) 「コンパが多い」(2)
「近代的な学部」(2) 「将来有望」(2)
(その他)「いろいろな角度からの学問」
「進路が決まっていなくて行くようなイメージ」
「従来の学部にとらわれない、ある程度幅の広い学部」
「新鮮」「目立たない」「歴史が浅い」
「実験室」「就職が良い」「理科について総合的に勉強している」
「女子大生にもてない」「外国の大学のような感じ」

(2) 『学際的研究』という言葉聞いたことがありますか。聞いたことのある方は、どういうことだと理解されていますか。

聞いたことがある……1 「国際的な学問」
聞いたことがない……99

(3) 学校の進路指導の先生、あるいは塾などに、総合科学部について質問したことがありますか。

質問したことがある……3
質問したことがない……97

質問したことのある方は、どのような指導を受けましたか。

「担任の先生に相談し、くだらないと言われた。」
「進路指導の先生に、学部の概要、ボーダーライン、配点などを相談した。」
「兄から、是非来る様に言われている。」

以上の様な結果を見ると、総合科学部は、地元広島においてさえも、十分な理解を受けていないということは一目瞭然であろう。かなりの量の情報を得ている筈の受験生でも、半数以上の生徒が総合科学部についての具体的な認識を持っていないことにな

る。実際、巷にあふれている受験雑誌等を見ても、総科について詳しく述べられているものは少ないようだし、大学を受験要項でさえも、やたら難しい言葉で飾られた学部の理念と、コース等の概要が述べられているに過ぎず、総合科学部の中で実際にどのような学問を行っているのか、それによってどのような利点があるのか、など受験生が本当に知りたい事をわかり易い言葉で適切に知るには、関係者に直接質問する他ないようだ。

この際、高校生百人のうち誰一人知らなかった「学際」などという言葉を取り回すのをやめ、もっとわかり易い言葉で、そして、もっと積極的に総合科学部をアピールしていったらどうだろうか。もちろん学際という言葉も、もっと一般に浸透させる必要はあるが、今のままでは総合科学部は「知る人ぞ知る」といった存在になってしまうし、それはもちろん総合科学部の理念にかなうことではない。近年、一部の大学で、さまざまなユニークな学部・学科が新設され始めたことからわかるように、高校生の中には、従来の既成のワケ内にある学部を抱き足らなく思っている者も少なくない筈である。総合科学部のあり方が強くアピールされれば、優秀で、やる気のある学生がもっと集まって来て不思議ではないだろう。またそれによって社会の関心が高まれば、地域社会に貢献する機会も増えてくるのではないだろうか。

「総合科学部」という名称は、他学部の名称の様に、中を行なわれている学問が直接わかるような名称ではないし、「学際」という言葉についても、まだまだ一般で広く使われている用語ではない。この点を肝に命じた上での積極的なアピールが必要だと痛感させられた。

(文責・向山 敦子)

7) ふりかえった総合科学部像

— 卒業生への質問 —



『総合科学部』は、従来の既成の学部 — たとえば、『教育学部』『文学部』『法学部』『理学部』といった学部とは異なり、実際、学部で学んだ者でなければ、一体どのような学部なのか想像しがたい学部である。（もっとも、正直なところ、総合科学部の学生だって総合科学部を理解している者は少ないのが現状なのだが—）このような総合科学部を卒業した学生は社会において、どのような扱いを受けるのであろうか。何年か後に確実に社会にでる我々にとって興味深いところである。そこで、58年度卒業生の方々3名に『ふりかえった総合科学部像』なるものをお伺いした。今回ご協力いただいた3名の方々は、地域文化コースで『アメリカ現代文学における都市 — ドライザーとベローの場合』を卒論テーマに研究をされ、現在、広島市役所市長室国際交流課勤務のMさん、社会文化コースで『生活空間の文化人類学的考察』を卒論テーマに社会人類学の研究をされ、現在中国新聞社の記者でいらっしゃるIさん、そして、大手スーパー勤務で、総科時代は『都市間の心理的距離に関する計量的研究』を卒論テーマに情報行動科学コースで研究をなさっていたKさんである。（順不同）

まず、社会において、総合科学部に対する最も素朴な問いかけである「総合科学部とは何か」「総合科学部では何を勉強するのか」等に対し、就職活動中の会社訪問や面接の際、あるいは職場での自己紹介の際、卒業生の方々はどのように答えられたのだろうか。

「総合科学部とは学際的な研究の場であり、旧来の学問体系にとらわれない学部で、あらゆる分野の授業を比較的簡単に選択できる。また、総合科学部が4つのコースに分かれており、そのコースの中でも細分化されていることを説明し、『総合科学』といった漠然とした名称を具体的に説明した」（Mさん）
「人文・社会・自然の諸科学を勉強しながら、創造的・総合的な研究をしようとする学部。専攻した社会人類学は、時間や地域を限定せず、さまざまな角度から人間の生活や文化などについて考察することができた。例えば、食生活を取り上げてみると、風

土・気候・宗教・儀式・家族関係など、さまざまな方面からとらえることができ、食事に対する新しい見方が生まれてくる。」（Iさん）

「4つのコースがあることを説明し、その中のひとつに自分が所属していることを説明した。」（Kさん）

では、以上のように説明なさっている（理解なさっている）総合科学部の出身者は、他学部出身者に比べ、どういったところが、長所であり短所であるのか、また「他学部出身者に比べ、これだけは負けない」というものは何なのか、といった点を伺ってみた。

「総合科学部出身の人は、何かほかの人より違った目で物事を見ようとする意欲の人が多いい。そのやる気がよい結果につながればよいが、結局何もできなかったに終わってしまうパターンも多い。好奇心旺盛なことは他学部出身者に負けない。」（Iさん）

「(総合科学部の利点は)総科という概念が世間になく、不可解であることの魅力、稀少価値であり、(他学部出身者に比べ、これだけは負けられないものは)総合科学部自体への理解度であり、総合科学部自体が異質であるということ。」(Kさん)

「利点としては、学部名のめずらしさからか、(他人に)興味をもってもらえる点にあると思います。それゆえ、何故、この学部を選んだのか、自分に合っていると思うかなどといった質問を多くされますがー。(また、総合科学部出身者は)どっちつかずになるという欠点がある反面、耳学問にしる多くの分野のことを聞けることで他学部出身者に優れていると思います。」(Mさん)

新氣淳二の飛翔批評話 — ③



「なんか居心地が悪いな」

最後の質問として、「総合科学部生として、ある意味で最も自分というものを理解してもらいたい面接など就職活動をなさった時に、総合科学部生としてのご自分を理解してもらおうと、苦労されたことがありましたか」と尋ねてみた。

「別に総合科学部生であったために苦労したとは思いたいが、しいていえば、焦点のあわせにくい学部生であったことかなー」(Kさん)

「総合科学部に対する質問が多かったこと」(Mさん)

「一体何を学んだか、わかりやすく説明をしてくれと求められたこと」(Iさん)

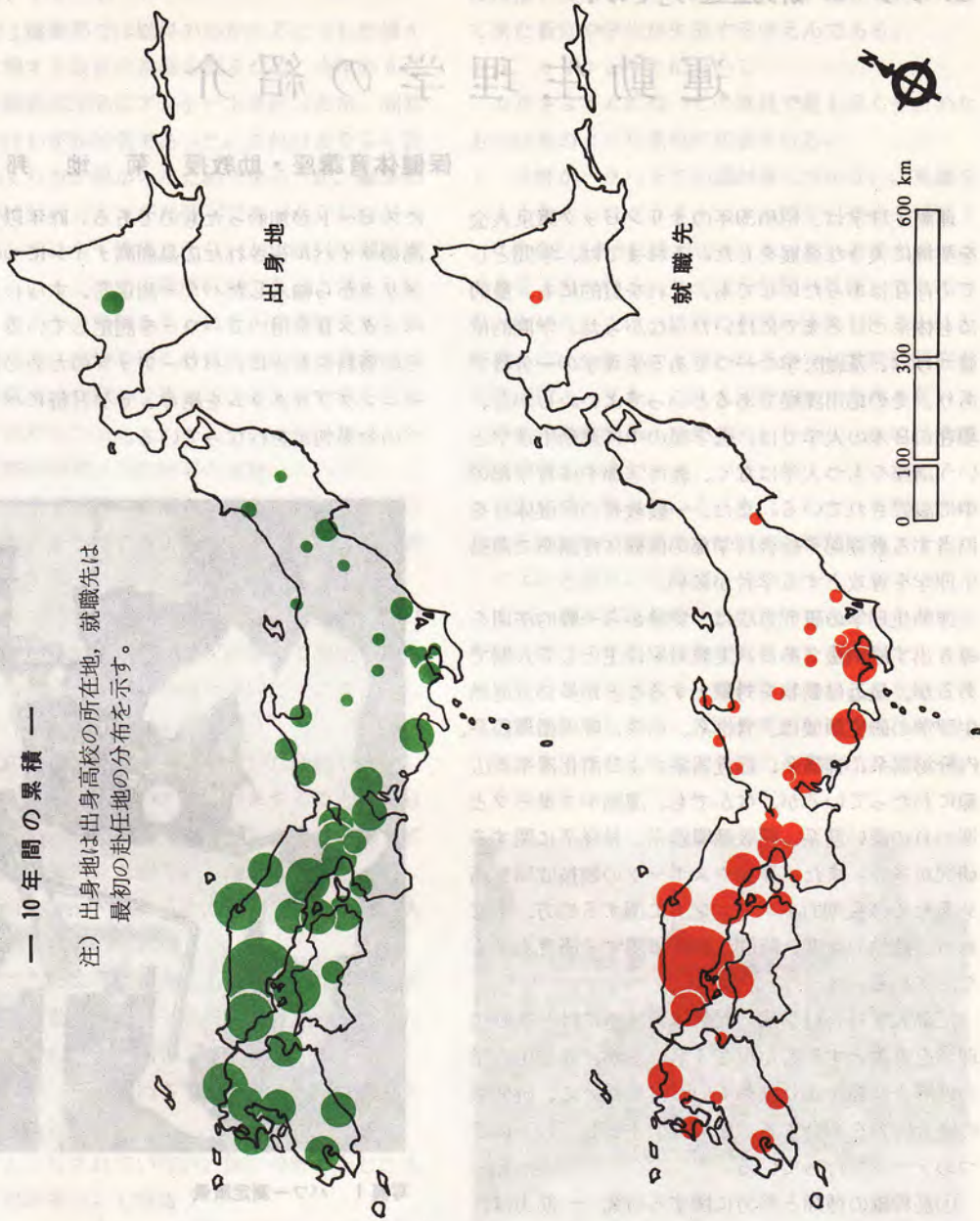
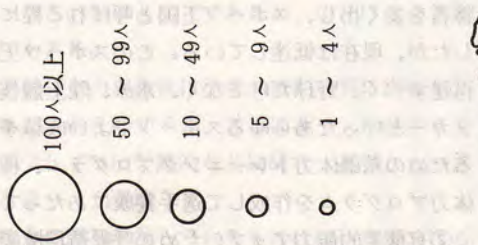
以上、質問を終えて「私は総合科学部をどのように説明するだろうか、理解してもらえるように説明できるだろうか。」と、密かに不安を感じざるをえなかった。総合科学部は、正直なところ、社会においてその実像が正確に理解されているとは言い難く、総合科学部生は、学部時代も卒業後も「総合科学部とは一体何なのか」と尋ね続けられるだろう。その時、総合科学部生ひとりひとりが、いかに答え、いかに説明していくかが、今後の問題である。社会は『総合科学部』に対して背をむけているわけでも、大きく手を広げているわけでもないのであるから。

(文責・隠岐 幸代)

8) 総合科学部生の分布図

— 10年間の累積 —

注) 出身地は出身高校の所在地、就職先は最初の赴任地の分布を示す。



2. シリーズ「研究室巡り」その1

運動生理学の紹介

保健体育講座・助教授 菊地邦雄

運動生理学は、昭和39年のオリンピック東京大会を契機に大きな発展をした。それまでは、学問としての存在はあったにしても、それを質的にも、量的にも体系づけるまでにはいたらなかった。学問的位置づけは、基礎医学の一つである生理学の一分科であり、その応用課程であるといつてよい。しかし、現在の日本の大学では、医学部の中に運動生理学という講座をもつ大学はなく、教育学部や体育学部の中に設置されている。また、一般教育の保健体育を担当する教養部や総合科学部の保健体育講座で運動生理学を専攻とする学者が多い。

運動生理学の研究方法は、実験から一般的法則を導き出す帰納法である。実験対象は主として人間であるが、最近では動物を対象とすることが多い。運動生理学の研究領域は、骨格系、筋系、呼吸循環器系、内分泌器系、神経系、感覚器系および消化器系と広範にわたっているが、なかでも、運動やスポーツと関わりの深い筋系、呼吸循環器系、神経系に関する研究が多い。また、運動やスポーツの競技成績を高めるための長期的トレーニングに関する処方、すなわち、運動の強度、時間、頻度に関する研究も多くなっている。

広島大学総合科学部の保健体育講座には、運動生理学を専攻とする者が現在4名いるが、運動生理学の理解と認識をより深めていただくために、研究室の研究内容を紹介する。研究は、主として以下の2つのテーマで行っている。

①筋線維の種類と筋力に関する研究 — 筋力は、骨格筋内で生成される化学的エネルギーが、物理的エネルギーに変換されたもので、骨格筋の種類と機能に大きな関連性を持っている。骨格筋は、赤筋、白筋および中間筋に分類されるが、赤筋は筋持久力、白筋は瞬発力、パワーに関係する。

最近、あらゆるスポーツにおいて、パワーの問題が重要視されている。昨年の夏、今年の春夏の甲子園をわかせた徳島の池田高ナインのパワーは、全国のファンの注目されるどころであった。ホームランや球速のはやいヒットが生まれる筋力の要素は、パワーである。パワーとは、瞬間的に発揮される瞬発力

にスピードが加わったものである。昨年以來、池田高のライバル視された広島商高ナインについて、アメリカから輸入したパワー測定器、すなわち、サイベックスIIを用いてパワーを測定している(写真1)。その資料をもとに、パワーアップのための筋力トレーニングプログラムを組み、6ヶ月毎にパワーアップの効果判定を行なっている。



写真1 パワー測定風景

広島県のスポーツは、かつては、オリンピック優勝者を多く出し、スポーツ王国と呼ばれる程に隆盛したが、現在は低迷している。このスポーツ王国を再建すべく、野球だけでなく、水泳、陸上競技、サッカーといったあらゆるスポーツでよい成績を収めるための基礎体力トレーニングプログラム、種目別体力プログラムを作成して選手養成にあたっている。

②有酸素的能力アップのための呼吸循環機能の分析 — スポーツや運動において全身持久性(スタミナ)が要求される。全身持久性は、有酸素的能力と

呼ばれる程、肺臓と心臓各機能の効率が大きく左右する。その効率とは、肺臓からできるだけ多くの酸素を摂り入れて、心臓からそれを速やかに運搬されるといった能力である。肺臓の機能は、呼吸数、呼吸量および酸素摂取量を測定することによって判定する(写真2)。心臓の機能は、心電図を記録して心拍数を求め、安静時、運動時および回復時の各心拍数を検討する。良い心臓とは、安静時の心拍数が少なく、同じ運動量のスポーツや運動を行なっても心拍数はあまり上昇せず、そして回復時の心拍数が安静時のレベルにすぐに戻ることである。

かつて、オリンピックのマラソンで2連覇したエチオピアのアベベ選手について、有酸素的能力を測定したことがある。それは、アベベ選手の強い秘訣を生理学的に分析しようと試みたのである。5度の傾斜がついたトレッドミル(踏車)のベルト上を260m/分のスピードで、これ以上走れないという時点まで追い込んだのであるが、回復時において心拍数も呼吸数も素速やく安静時のレベルに戻り、すばらしい呼吸循環機能を持っていることが判った。最近、広島県実業団の長距離選手の呼吸循環機能を測定し、その資料にもとずいて基礎体力トレーニングプログラムを作成している。選手達の記録は徐々に向上し、数名は日本長距離界のトップレベルにランクされるまでにいった。

運動やスポーツでよい成績を収めるためには、科学の導入が必須のものとなっている。その意味からも、運動生理学の寄与する点が多い。また、一般人の健康づくりの運動処方方の確立にも運動生理学の果たす役割は大である。



写真2 肺臓機能に関する測定風景

3. 過熱！聴講手続争奪戦

編集部

「今年は聴講手続きがすごいらしいな。なんでも席の取り合いで、ケンカがあって大講義室の窓が割れたって話を聞いたぜ。」と、私は中華定食の水けのないキャベツをほおぼった。「さっき、6時ごろかな、大講義室の前を通ったら10人ぐらい座とったぜ。泊まりこみじゃないかな。」と続けると編集長役の橋本は黒いギョウザをつまみながら、「ふーん、オレらの時に比べたら異常やな。」発言は大胆なくせにあまり乗り気でない。逆に私は不遇な食事での沈黙には耐えきれず、思わず雄弁になってしまった。「いっちょ取材にしてみるか！大講に。こりゃ飛翔の記事になるで。まあ、話だけでも聞きにいこうや！」

「出席がほとんどなくてもBがとれた」などの単位取得の楽な講義を“らくしょうかもく”と呼び、先輩が後輩に、神々しくではなく、今や、あたり前にそれを伝えるということが習慣化されつつある。

(かつて広大では、この“らくしょうかもく一覽表”なるものが森戸道路に掲示され、問題になったことがあった。) こういうロコミは昔からあったわけだが、集団的な泊まりこみにまで発展した今年の新入生(だろう)の意識はどのようなものであるのか？ 楽勝科目が生じる授業内容はここでは置いておくことにして、新入生の声を聞いてみたかった。それは今度、入れ替った我々、飛翔編集部の新しさを、はやく何かにつけてみたい衝動から生まれた動機だったのかもしれない。「……そうやな、まず行動せなあかん。」橋本はとにかく、すぐに店を出ることに同意した。

カセットレコーダーを準備し、北門を乗り越えて大講義室の前にやってきた。もう9時をまわっていただろう。薄暗がりには、新聞紙の上にとむろしていたり、早々と毛布にくるまっている人影もある。20数人だろうか。話し声、笑い声に遠足を思いだす。ジュースの1ℓピンは見かけたが、酒はなかった。すかさず橋本はインタビューに突進した。さすがだ。さっきの中華料理屋での無口さは、やはり料理のせいだったのだろう。

— 今晚は。総合科学部の『飛翔』って雑誌なんだけど。ちょっと話、聞かせてくれないかな。聴講すんのにね、前の日から泊まりこみで待ってんのなんが、ぼくらの感覚からいうと異常だなんて感じるんだけど。

「(異常っていわれも)ぼくは去年のことは知らないけど……。哲学(この講義は久野昭教授の哲学らしい)はぼくらの必修指定課目なんです。取らないと、上にあがれないし、せっぱつまっている。それに、テスト前徹夜するのも、ここで徹夜するのも変わらんから。」

— 一晩中ここで待つのが苦にならない？

「あんまり気にならない。もう慣れました。2回目です。最初は、式部先生の倫理学。」

ざっと見ると、ヤロウばかりと思っていたが、女の子もちらほらまじっている。その中でも2人組の女の子を見つけた。

— 泊まりこみて、すごいね。楽しい？ なんかくレクリエーションみたいだけど。

「受験勉強から解放されたって感じで……。でも、こんなことまでせなあかんのかって思うわぁ。」

— 別にしなくていいんじゃない？

「楽なの取りたい思うてん。」

— 一晩中、ずっといるの？ 女の子なのに。

「それをいわれるとズキやな。」

関西弁ののんびりした調子のかわいい子だった。大丈夫かいなとオジさん気分で心配しちゃいます。

大講の入り口に毛布にくるまった、7~8人のグループがあった。そこに足を踏み入れ、声をかけるや否や、「〇〇研や!!」「アンケートやな」という罵声が飛んできた。飛翔を手に反論するも、彼らが冗談でやっているのはわかっていた。

— みんなで徹夜するのってどう？

「楽しいって感じで。コンパみたいなもんですよ。下宿にいたってしょうがないし。」

— どうしてこんなことすんの？

「上(級生)から宣伝がきてんですよ。聴講すんのきびしいって。」

— けんかがあってガラスが割れたって聞いたけど……。

「あれケンカじゃないスよ。天文学のとき、押すな、押すなで、一気に押されて、手で割れたんスヨ。けががなかったのが不思議だったけど。」

—フーン、でも、こんなの見てると松田聖子のコンサートみたいだね。

「そういう感覚ですね。」

私が聞いたうわさの真相にふれていた。楽しんでやってるっていう、これもひとつの学生生活になってきたのだろうか。非常に平然としている。でも、次の三人組はちょっと変わっていた。

—ちょっと話、聞いていい？

「……………」

『飛翔』って雑誌なんだけど……

「……………いいです。」

あとはこっちが恥かしくなるぐらい質問したが、視線をあわせようとせず、無関心にあしらわれた。今まで話をした学生は共通にインタビューに気楽に答えてくれる明るさを持っていたが、彼らにはそれが微塵も感じられなかった。

斬気淳二の飛翔批評話④



「ここ、ちがうんですって」聴講手続

「別にぼくは取らなくてもいいんです。」変な答えが返ってきた。

「でも女の子なんかいるでしょ」

—えっ、他人にとってやってんの？

「クラス全員の時間割を出させて、だれがどれにでるか決めてんです。」

—へー、グループつくってやってんの。そんで夜に女の子がおにぎりなんか、もってきてくれるのか？

「この前、徹夜した時、持ってきてくれたんスけどね。ちょっと今日は無いですね。」

もうこうなったら聴講手続争奪戦である。集団化と分業化。今度は、“聴講承ります”なんて、商売が始まったりなんかして、挙句のはてには“単位研究会”なんてできちゃったりして。どうなるんしょ？

自動販売機の所に理学部の3人組がいた。話を聞いてみましょう。

「異常ですよ、今年は。整理券なんか、配った方がいいと思いますよ。」

—制度的に問題があるのかね？

「ありますよ。ぼくら2年だけど、去年はこんなことはなかった。明日また、もめますよ。紙（注—“この席予約します”なんてとぼけたことを書いて机に貼るといふ席取り法。これがおととしまでは通用してたなんて言うのと石投げられそう）はがされたり、荷物をよせられたり、人がおらんとだめだとか、いろんなルールが勝手にできちゃってる。くじにするとかすればいいのにね。自然災害概論のくじは正解やったね。」

さすがは2年生、具体的な改革案なんかおっしゃってくれて、ある程度さめてるって感じ。だけど、馬鹿馬鹿しいって思っただけで、今、この場所にいるのは矛盾してやしないかね。

インタビューが終わる頃には雨が落ちてきました。今回の聴講合戦、あおっているのは他でもなく、学生自身のような気がします。この雨が彼等のフィーバー熱を静めちゃうのでしょうか？ いや、逆に、火に油で、「雨にまけてたまるか、オレは絶対、取るんだ！」なんてがんばっちゃう人たちの方が多いかもしれませんね。

考えてみると、彼らは先輩の言うことを鵜呑みにして信じてしまう、すごく素直な学生なんですよ。哲学とか倫理学とかまだ聞いたこともない学問なのに、絶対これしかないって思っちゃう。素直すぎる学生なんてちょっと気持ち悪い。新人生全部が全部そういうわけじゃないけど、一つの傾向ではあるみたいだ。でも素直になって憶えちゃわないとできないんだよね、共通一次。（あっ、共通一次の点、聞いてみりゃよかった！）そういう素直さは、前期が終了しても変わらないのだろうか？ 後期の聴講手続きはどうなることでしょうか？

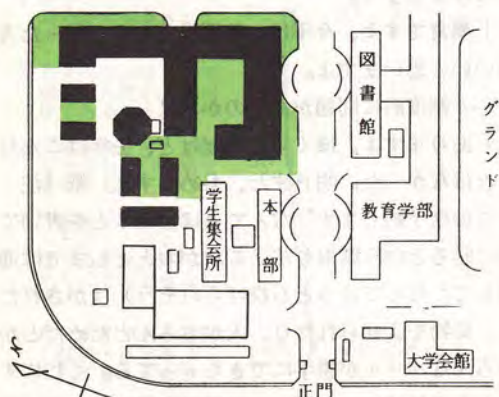
（文責・桐木 淳二）

4. シリーズ「数字」その1

1 1 9 1

編集部

1191という数字を見て皆さんは何を思い浮かべたでしょうか。実は、この数字、下の図(■色部分)を見てもらうとわかると思いますが、総合科学部の校舎付近に置いてあった自転車の台数(7月4日、13時快晴)なのです。



自転車の台数というと、私は入学して初めて大学にやって来たときのことを思い出します。大学正門を通り抜け、大学構内を歩いてみると、えらく小さな大学だと思いつつも、自転車がめいっぱい置かれていたのには驚かずにいらませんでした。たぶん、他県から来た方なら、そう思ったに違いありません。ここではじめて、自転車は広島において必需品なんだということを認識したのでした。(そこで、私が中古自転車を買いに東奔西走したことは言うまでもありません。)

そして、その自転車で広島の街を走りまわって気づいたことは、自転車の数が多いのは大学内だけではなかったということです。広島を中心と言うべき、紙屋町から八丁堀にかけても、いたる所に自転車が置かれていて、その数は異様なほどでした。自転車を置こうと思っても、置く余地がいくら多く留めてあるのです。特に本通りが自転車通行禁止なので、その周辺に駐輪されるわけです。

自転車の数が多いということは、それだけ利用者が多いということです。利用者は大学生や高校生などが主であると思いますが、主婦やサラリーマンの利用者も多いようです。大学の教授も自転車で通勤している方が多いらしく、そんなことから利用者の幅の広さがわかります。

このように利用者の輪がひろがっているわけです

が、やはり利用せずにはいられないという状況があると思います。私のある友人も入学した当時は、大学生にもなって自転車なんかに乗ってられるかと言っていました。今では自転車愛好者の一人となっています。やはり、大学に行くのにも、中心街まで出るにしても自転車で行けるというのが強みのようです。誰だって、市電で110円出して行くよりも節約的な自転車で行く方を選ぶでしょう。本通りや映画に行ったり、広島-巨人戦も最後まで、市電の時間を気にせず熱中して応援できるという特典までついてくるのです。

広島の自転車文化とも言えるようなこの現象は、広島の地域性から生まれたと考えられます。地理的に広島は繁華街がひとつの場所に集まっていて、距離的にも住宅地から遠くないということです。つまり、たいていの所からは自転車で十分なわけで、老若男女問わずにほとんどの人が自転車でやって来るとです。しかし、最近では自転車の便利さに溺れてしまっている感じで、自転車が氾濫しています。金田さんの宣伝ではないけど、せめて1mないと通れないという所もあります。よりよい自転車文化を発展していくために個人個人で気をつけてほしいと思います。

自転車文化は便利さのためだけでなく、健康の上でも活躍するものです。アメリカなんかでは特にその見直しがあり、通勤なんかでかなり利用されているようです。広島では、自転車は不可欠なものとなっています。ここで自転車文化をもう一度、見直したいですね。We Love Bicyclesの精神を大切に!!

(文責・野田 啓三)



5. 昭和58年度新入生歓迎西条研修について

学生生活委員会

恒例の総合科学部新入生歓迎西条研修が、本年度は5月14・15の両日、西条共同研修センターで実施された。以下に行事の概要と、研修についての参加者のアンケート結果を交えて報告する。

参加者は新入生99名、教職員20名で、従来と変わらぬ多数の参加をいただいた。プログラムの作成に当っては、新入生の積極的な参加があった。

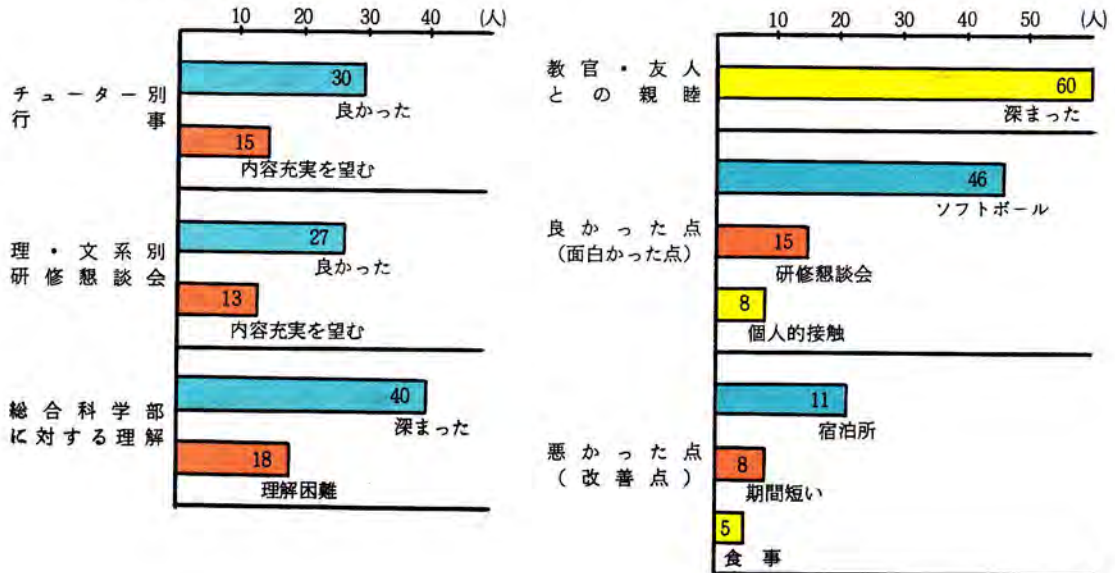
研修は、途中西条新キャンパスの見学から始まった。センターでは、岡本学部長の歓迎の辞に続いて、久野昭教授（比較文化）が「日本文化について」と題して講演され、日本人として、自らを見つめなおす視点を示された。夕食後は、広大紹介映画に続いて、文・理の各系に分かれて、教官を交えての活発な質疑が行われた。公式行事は10時過ぎに終わった。

早朝ジョギングで明けた2日目は、朝食後チューターグループ単位の研修がもたれ、現在の学生生活や将来の希望などをめぐって、話し合われた。ソフトボール大会は、各チームが趣向をこらし、チューターも加わって、にぎやかに汗を流した。五月の風は、さわやかであった。

参加者の西条研修に対する感想・意見をアンケートした（参加者99名のうち、回答者65名）が、質問項目と回答結果は、下図の通りである。

チューター別行事、理系・文系別研修懇談に高い評価を与え、総合科学部に対する「理解が深まった」と答えている人が大半で、研修目的は十分達成されたようである。しかし、「もう少し時間が欲しい」や「内容を充実して理解しやすくしてほしい」という意見も多少あり、今後若干の改善の余地がありそう。一方、教官・友人との親睦については、ほとんどの人が「深まった」と答えており、親睦を深める手段となった「ソフトボール」や「個人的接触」に高い評価を与えている。さらに、今後の改善点については、研修センターの施設不足のためグラウンドの合宿所に泊った人たちから提示された「宿泊所の問題」が最大で、その他「もっと長い期間」や「食事の改善」などが希望としてあげられている。

西条研修アンケート



編 集 後 記

今年、私たちの総合科学部は、新たに、10期生を迎えました。そしてこれを機に、『飛翔』では「総合科学部を考える」と題する特集を組んでみましたが、いかがでしたか。なにぶん学生編集委員の力量不足、計画性のなさから不十分な内容に終わり、我々のマスターベーションにすぎないという感さえます。しかし、それでもなんらかの問題意識なり、感慨なりを持って読んでいただけたら、我々にとって幸いなことです。

当初、我々はこの特集を組むにあたって、学生編集委員で話し合いをしました。そこでは「組織だけユニークなもので、中にいる人間は昔と変わらないのではないか」「個別研究をなさっている教官が何人集まられても、それでは、学生は総合的な視野を身につけられないのではないか」などの問題点が出されました。確かに今回の特集でも、事態が改善されているとはいいがたい状況が、示されています。「このままではジリ貧になる」という指摘も、的確な指摘のようです。しかし、同時に今回、特集を組んでみて、悲観的な状況ばかりでないことも知りました。教官アンケートに解答をお寄せ下さった、数少ない先生方は、たいへん熱心にアンケートにお答え下さいました。また我々の知らないところで、地道に学際研究と取り組んでおられる先生方も多いようです。例えばアジア研究講座では、常に教官と学生が密な話し合いを持ち、研究教育にあたっておられます。あるいは、環境科学コースでは、大山巡検でユニークな取り組みをしているとの報告もありました。

「総合科学部は、まだ過渡期にある。」ということをお北西允法学部教授がおっしゃいました。確かに私たちの学部はまだ10年の歴史しか有していません。しかし過渡期だからという甘えを持ってしまっているのではないでしょう。私たちは常に自分たちの現状を検証し、あるべき姿を求めて自己改革していかなければならないと思います。それは10年目だからということではなく、常に反省と模索が必要なのでしょう。私たちの総合科学部が評価を受けるか否かは、この反省と模索にかかっているのです。

「夢のある学部にしたい」という鈴木修次教授の言葉をもって特集をおわりたいと思います。

最後になりましたが、今回の『飛翔』を出すにあたって、今堀誠二広島女子大学長はじめ、インタビューに応じて下さった北西允教授、田中久男助教授、市坂純雄助教授の諸先生方には、御無理を申し上げ、ご迷惑をおかけしました。学生編集委員を代表して、この場でお礼を申し上げます。

(編集委員・橋本 記一)

『飛翔』No.25

編 集 委 員

56年度生 隠岐 幸代 桐木 淳二 竹下 斉 橋本 記一 山田 順二
58年度生 海堀 修 櫻井 幹士 野田 啓三 向山 教子

なお、編集にあたっては、広報委員会の「飛翔」担当、堀 信行、米田 巖、斎藤忠資、小村 堯の各教官、および事務官、南沢大雄、内田精二の方々の協力を得ました。